

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の
「相良晴広 ～大名船『市木丸』を建造、明へ派遣～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2024 年 8 月 23 日(金)

大友時代を
生きた人々



鹿毛 敏夫

相良晴広

室町時代や戦国時代、西日本の守護大名・戦国大名クラスの領主は、自らの船を建造、保有する船持ち大名としての性格を有していました。例えば、豊後の守護大名大友親世は15世紀初頭、「春日丸」と名付けた大型大名船を保有し、九州から兵庫までの瀬戸内海航路で1500石の積み荷を輸送していました。

このような大名が西日本に多いのは、大阪以西の守護領国のほとんどが海に隣接しているという地理的条件が大きかったことと言ってもありません。実際、日本列島を、大阪を基点に東と西に分けた場合、東日本には上野(群馬県)、下野(栃木県)、甲斐(山梨県)、信濃(長野県)、飛騨・美濃(共に岐阜県)、近江(滋賀県)、伊賀(三重県西部)、山城(京都府)、大和(奈良県)などの海を有さない国が多いのに対し、西日本

大名船「市木丸」を建造、明へ派遣



相良家歴代墓碑。右から3番目が晴広墓(熊本県人吉市)

では美作(岡山県北部)を除く全てが面しています。肥後の戦国大名相良氏の歴史

を記録した『八代日記』(慶応義塾大学蔵)を読むと、天文23(1554)年2月23日、同家17代当主の相良晴広は、「市木丸」という大名船を建造し、徳洲(熊本県八代市)の港で「船おろし」(進水式)をしたことが分かります。さらに注目したいのは、翌3月2日に、その「市木丸」を「渡唐」(中国明へ派遣)したとの記述です。晴広は、新造した自らの大名船を、完成から10日もたたないうちに遣明船として就航させたのです。その素早い対応から、この新造船は、当初から中国派遣を想定した仕様だったと考えられます。なぜ、これほど急いだのでしょうか。その答えは、7年前の天文15(46)年に相良氏領肥後の山中で見つかった宮原銀山(熊本県あさぎり町)にあります。

16世紀半ば、銀は中国に渡る日本船にとって、対明貿易上の主要商品であるのみでなく、現地に長期間滞在する乗船者たちが必要な食料や生活物資、あるいは日本への土産などを購入する際の支払い手段でした。遣明船を派遣して明との交易を実現するには、資本となる銀をある程度、潤沢に保有しておかなければならなかったのです。

相良氏は、その原資となる銀の鉱脈を発見し、数年のうちに精錬技術を確立して増産に成功したと思われれます。そして、待望の「市木丸」を完成させ、大量の銀を積み込んで東シナ海の先、明へと就航させたのでしょう。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1回掲載